



二〇二〇年度卒業論文要旨集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/7578

二〇二〇年度卒業論文要旨集

掲載にあたって

馬場 俊臣

北海道教育大学教育学部札幌校言語・社会教育専攻国語教育分野の令和
二年度卒業生の学士論文（卒業論文）の要旨を掲載します。

札幌校国語教育分野では、三年生から各研究室に所属しゼミ活動などを
通して卒業論文の指導を受けます。四年生になってからは、卒業論文構想
発表会（六月九日）及び卒業論文中間発表会（十月十三日）の二回の発表
会を学生と教員が参加して実施し、研究経過を発表しました。そして、十
二月二十五日に卒業論文を完成させ提出しました。さらに、一月二十六日
に行った口頭試問を終えて、卒業論文・卒業研究が完成しました。

令和二年度は、新型コロナウイルス感染防止のために、二回の発表会はい
ずれもZoomを使って行いました。また、提出方法も、印刷した卒業論文
を直接提出するのではなく、大学教育情報システムを使って電子ファイル
を提出するという異例の方法で行いました。

学生たちは、卒業論文作成に取り組むとともに、教員採用試験の準備・
受験や就職活動が前半に重なり、また八月末からの教育実習などにも熱心
に取り組んできました。そうした努力の末に完成した卒業論文の要旨をこ
こに掲載します。

※掲載許諾を得られた要旨のみを掲載しています。

「学びに向かう力」を育てる国語科授業について

国語科教育学第二研究室 六一六五 辻野 友哉

本研究の目的は、「学びに向かう力」の涵養と「メタ認知」に関するもの
との関連性を明らかにし、「学びに向かう力」の涵養を目的とした小学校中
学年の国語科授業を構想することである。

まず、本研究では、「学びに向かう力」の涵養における「メタ認知」に関
するものとは、メタ認知的知識とメタ認知的活動という二つの側面がある
ことを明らかにした。これらが育つことによつて、自分の学びや変容を自
分自身で見取ることができるようになる。その結果、学びに対して主体的
になり、「学びに向かう力」の涵養がなされることを明らかにした。

メタ認知的知識は、特に方略についての知識を獲得することで育ち、メ
タ認知的活動は、自身がどのようにメタ認知的モニタリング（認知につい
ての気づき、感覚、予測、評価）とメタ認知的コントロール（認知につい
ての目標設定、計画、修正）を行ったかを自覚することによつて育成され
ることを明らかにした。

これらを踏まえ、方略についての知識を獲得する、またメタ認知的モニ
タリングとメタ認知的コントロールを自覚するための授業構想を行った。
方略についての知識の獲得は、方略を知る、使い方を知る、なぜ、いつ使
うのかを知るといった過程を経験させ、メタ認知的モニタリングとメタ認知
的コントロールの自覚は、事前、遂行、事後の三段階で振り返りを行うこ
とで、自分の学習の進め方を自覚させることを提案した。

今後の課題は、本研究で提案した授業実践を行うことで、その効果につ
いて検討することである。

肯定文に現れる「全然」と「普通に」の比較

日本語教育学研究室 七一〇六 安藤 鞠音

本研究では、肯定文において、類義であると考えられる「全然」と「普通に」の共通点と相違点を見出すことを目的とし、用例の分析を行った。分析の対象は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』・『日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)二〇二〇年版』・『Twitter 高度な検索』で収集した用例である。

共通点として、①程度副詞としての用法を持つ、②程度副詞としての用法はその語が出現した当初から現代にかけて新しく出現した用法である、③否定的な文脈を必要としそれを覆す、という三点を挙げた。

相違点として、①表す程度が、「普通に」より「全然」の方が高い、②「全然」は目立って共起の多い語が複数あるが、「普通に」には同様の傾向は見られない、③「普通に」より「全然」の方が、比較の文脈との馴染みが良い、④「全然」より「普通に」の方が、疑問文との馴染みが良い、⑤「普通に」の用例の中には、見かけ上「全然」と置き換わることが出来ても、置き換えることによつて文意が大きく変化する用例がある、という五点を挙げた。これらの相違点の原因としては、①はそれぞれの語が元来持つ意味が関係しており、②・③は①の程度の違いが影響していると考えられる。④については、「全然」の用例の中に疑問文は見られなかったが、「普通に」の用例においても僅かであり、更なる検討の余地がある。

以上から、「全然」と「普通に」は、意味上の共通点がある一方で、表す程度の違いや共起する語の違い、馴染みややすい文脈の違いがある、ということが分かった。

人気を保ち続けているバンドにおける歌詞の特徴

日本語教育学研究室 七一〇八 大門 祐斗

本研究では、人気を保ち続けている複数のバンドには、何か共通した特徴があるのかどうか人気を保ち続けているとはいえないバンドと比較しながら調査、分析を行った。

調査、分析の対象としたバンドは、各バンドの結成年の近さとオリコンのシングル、アルバムのランキングから人気を保ち続けているバンドとしてスピッツ、Mr.Children、B'nの三バンド、人気を保ち続けているといえないバンドとしてLINDBERGを設定した。また分析方法は、設定したバンドの全てのシングルの歌詞を通読し特徴となりそうな表現から独自に「恋愛」「時間」「心情」「季節」の四つのテーマを設定し使用頻度を分析した。さらに、歌詞の中の人称の使用頻度についても分析を行った。

分析の結果、人気を保ち続けているバンドには、「恋愛」のテーマが多く出てきていることかつ「恋愛」のテーマの内「愛」についてのワードが多く出てきていることかつ「時間」のテーマの内「現在」「未来」のワードが多く出てきていること、「心情」のテーマが多く出てきていることかつ「心情」のテーマの内マイナスのワードが多く出てきていること、人称の内「君」という人称が多く出てきていること、四つの特徴があると分かった。また、人気を保ち続けている三バンドをみると「時間」のテーマの割合と「心情」のテーマの内プラスのワードに比べマイナスのワードがどれだけ多く出てきているかに違いが見つかった。そこから人気を保ち続けているバンドの中でも以上の特徴がある場合人気に差が出てくるのではないかと考えられる。

上代における漢字に受容の特徴について

——『古事記』の固有文字の分析を通して——

国語科教育学第二研究室 七二〇九 井村 玲菜

本研究では、上代に編纂された書物の中で、『古事記』にのみ登場する固有文字に着目し、上代において漢字がいかに受容されたかを明らかにすること、当時の漢字受容の特徴について、その一端を明らかにすることを目的とする。固有文字の分析には、主に注釈書や『大漢和辞典』を用いた。

調査の結果、最も多かったのは、「焼」を「炙」、「筍」を「笋」のように、一般的に用いられる漢字を用いずに表した例である。字義の細かい違いに着目し、より文脈に合った漢字が選ばれているようであった。

次に多かったのは、「延」を「莖」、「曙」を「署」のように、漢字の一部を付け加えたり、削除したりする例である。付け加えられるのは部首が多く、材料や原料、素材を表す部首が多かった。削除されるのも基本的に部首であり、旁だけでも同じ意味を持つ場合は、省略される傾向があった。似た例として、別の偏や旁が付け加えられた漢字もあった。

残りは少数の例であるが、仏典語など、中国で使われる漢語に日本の読みを当てたもの、万葉仮名のように、漢字の音を借りて日本語を表したものがあつた。

『古事記』の固有文字には、中国語の本来の用法から逸脱したものが見受けられた。ただ、漢語はなれの用法が見られたのは一部分であるため、表記者は中国から伝わった漢字を最大限に活用した上で、そのままではどうしても表すことができない言葉のみを他の漢字や用法で補ったのだと考えられる。これが、上代における漢字受容の特徴の一つであると言える。

日常会話におけるディスコミュニケーションと国語科教育

国語科教育学第一研究室 七一一五 越前 亜美

本研究は、日常生活の中で頻繁に発生するディスコミュニケーションとどのようなものか明らかにすること、教科書教材を用いたディスコミュニケーション教育の成果と課題を明らかにすることが目的である。本研究におけるディスコミュニケーションとは、「人間同士の関わり」、「意図」、「情報伝達(言語、非言語)」が含まれるコミュニケーションにおいて、これらのいずれかの要素が充たされていないものとする。

まず、ディスコミュニケーションの詳細について明らかにするために、従来のコミュニケーションモデルの問題点を踏まえたコミュニケーションプロセスのモデルを作成した。このプロセスは単なる言語情報の伝達ではなく「意図」も含めたプロセスとなっていることがこれまでのモデルとの違いである。それを踏まえてディスコミュニケーションについて七つの「原因」、六つの「発生地点」、三つの「その後の対応」を明らかにした。

国語科教科書調査は、ディスコミュニケーション教材の「原因」「発生地点」「その後の対応」の三観点と「描写」「種類」「課題」の三観点のかけ合わせの計九つの観点で行った。その結果、日常で発生するディスコミュニケーション場面を想定しやすいよう題材や描写を工夫している点や、ディスコミュニケーションの予防の取り扱いが充実している点は成果と言えるが、教材数が少ない点、原因やその後の対応の扱いに偏りが見られる点が課題として明らかになった。

今後は、授業の調査も行うことで、現在行われているディスコミュニケーション教育にどのような成果と課題があるのか明らかにしていく。

「疑問詞十も十格助詞」形式について

——「疑問詞十も十格助詞十も」形式との比較から——

日本語学研究室 七一一九 原田 開斗

本研究の目的は、「だれもが」のように、疑問詞の後に「も十格助詞」が来る「疑問詞十も十格助詞」形式の使用実態と成立条件を明らかにすることである。「だれにも」のように、疑問詞の後に「格助詞十も」が来る「疑問詞十格助詞十も」形式との比較に基づいて調査及び分析を行った。

調査は、まず『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用した用例調査を行い、次に収集された用例の自然さを確かめるアンケート調査を行った。

用例調査では、両方の形式の用例を併せて約二万一千件収集した。その後、それぞれの形式を疑問詞ごと、格助詞ごとに分類した結果、「だれもが」「だれにも」などが特に多く、用例数には大きな偏りがあることが明らかになった。また、アンケート調査の結果、用例調査で収集された用例が必ずしも自然と判断されるわけではないことが明らかになった。

以上のことから、「だれもが」「だれにもが」のように格助詞が「が」である場合と「いくつもの」の場合は、「疑問詞十も十格助詞」形式のみが成立すると判断した。これらが成立する理由として、格助詞「が」が「も」に前接した「がも」という順序が成立しないこと、疑問詞「いくつ」は数量表現であり、「数量表現十も十の」という形式の一種として「いくつもの」が成立することを指摘した。また、格助詞が「が」の場合と「いくつもの」の場合以外については、「だれにも」など一部の「疑問詞十も十格助詞」形式において、「だれにも」のように同じ疑問詞・格助詞の「疑問詞十格助詞十も」形式がより自然と判断されやすい傾向があることも明らかになった。

話し合いの振り返り学習に活用できる論点の可視化の検討

国語科教育学第一研究室 七一二二 畠山 凌

本研究の目的は、話し合いの振り返り学習で活用でき、論点を把握した整理・修正したりする能力(以下、論点に関わる力)の育成に適した論点の可視化法を考案することである。

まず、話し合いの振り返り学習についての先行研究から、話し合いを記録する各記録媒体(音声・映像・文字)を振り返り学習で用いることのメリットとデメリットを整理した。その結果、論点に関わる力を育成する場面に用いる記録媒体には文字記録が適していることを明らかにした。また、ファシリテーション・グラフィック等の従来の論点を可視化する方法の分析を行った。その結果、論点に関わる力を育てる論点の可視化法には、「①論点の移り変わり」と構造を捉えられる「②論点の移り変わり」と構造を具体的な発言に結び付けられる「③教師が作成することができる」の三つの条件を満たすものが適していることを明らかにした。

以上の条件に合う可視化法として新たに「論点可視化グラフ」を考案した。これは、論点と各発言がどのように対応しているかを可視化するグラフである。また、実際の中学生の話し合いをこの可視化法で整理し、その有効性を検証した。その結果、この可視化法には、論点の移り変わりの傾向を捉えられることや話し合いを進めるために特に有効な働きをした「メタレベル」の発言を発見できるというメリットがあることを明らかにした。この可視化法を用いることで、話し合いの展開の仕方やメタ的な発言についての指導が可能であると考えられる。今後は、この可視化法を改善すると共に、この可視化法を用いて様々な話し合いの分析を行っていきたい。

ユニバーサルデザインの観点を取り入れた小学校国語科授業についての研究

——「看图作文」を用いた「書くこと」の授業——

国語科教育学第二研究室 七二二四 美馬 良哉

本研究では小学校国語科における「書くこと」のユニバーサルデザインの具体的な手立てとして「看图作文」が有効なものであるか、先行実践などをとに考察し、授業デザインをすることを目的とした。

特別支援教育とインクルーシブ教育での先行実践から、障害のある学習者への配慮として「焦点化・視覚化・共有化」の三つの要素が有効であるということが分かった。抽象的な概念を言語化することが困難な学習者でもこの要素を含めた指導により、「書くこと」の能力の向上が期待できる。さらに、それらが「看图作文」の授業においてどのように含まれているかを、小学校及び中学校での実践を撮影した動画をもとに考察した。「看图作文」の授業では、文章執筆の題材となる絵を提示することで視覚化されるだけでなく、書く対象が具体的に焦点化された活動が可能となる。また、学習者同士で作文を共有する「協同学習」の場を設定することで、作文が苦手な学習者に対して効果があることが分かった。特に小学校での実践では協同学習前後に書かれた作文を比較すると、文章量が増えただけでなく、主語と述語、接続詞を適切に使用できるようになったなど、文章の質的な向上もみられた。

以上のことから「看图作文」は授業のユニバーサルデザインに必要とされる要素を含んでおり、障害の有無に関わらず全ての子ども達の「書くこと」の力を向上させる効果があると考えられる。

安部公房「赤い繭」論

近代文学研究室 七二二八 目黒 舞鈴花

本研究では、多くの先行研究のように「おれ」の繭への変形を何らかの比喩として捉えるのではなく、変形後の姿が繭であったのはなぜかを明らかにすることを目的として本研究を行った。

まず、安部公房の生い立ちについて調べる中で、「おれ」が安部公房の分身のような存在であること、そして彼の他作品の主人公にもまた彼自身の思いが反映されていることが明らかとなった。彼にとって本作品は単なる寓話ではなく、現実の問題に深く迫ろうとする現実的な物語であったといえる。

次に、「おれ」の人物像を整理し、本作品における「家」について考察する中で、「おれ」が求めていた「家」とは「house」でも「home」でもなく、ただ休むことのできる「空間」であることが明らかとなった。「おれ」は自身を解体し、紡ぎ、繭へと化すことで、誰にも妨げられない自分だけの「空間」を手に入れたのである。

次に、安部公房がトポロジーに精通していたことを踏まえ、トポロジーについて調べる中で、「射影平面」という図形が「多くは楕円形」とされる繭の形と非常に似ていることを発見した。

最後に、安部公房の他作品と比較・検討する中で、生きている人間が何かに変形するとき、変形後も有機物として存在することがわかった。

以上のことから、その役割や形、性質から『赤い繭』という作品の中で「おれ」が変形するのは、繭という物体が最もふさわしいものであったという結論に至った。

学習者から問いが生まれる国語科授業の検討

——「学びの共同体論」を中心に——

国語科教育学第一研究室 七二二九 山口 航輝

現在施行されている学習指導要領が求める、「主体的・対話的で深い学び」と「学びの共同体」論の授業には共通点がある。その共通点とは学習者が自ら問いを見いだしそれを解決することである。本研究の目的は、その共通点に着目し「学びの共同体」論の授業を分析することで、学習指導要領が求める学びの実現にどのような示唆を与えるのかを考察することである。

まず、学習者から表出した問いに着目し、「学びの共同体」論における授業の分析を行なった。その結果、表出した問いは八種類あり、それらの問いが表出する条件は、音読の時間を十分に確保することと自由度の高い言葉かけから始まる対話が授業の中心であることが明らかになった。また、「学びの共同体」論における授業で学習者から表出した問いは授業内ですべて扱われていた。しかし、常に学習者から表出した問いをすべて授業で扱うことは困難である。その課題を解決するために、学習者が問いを生み出している、「学びの共同体」論ではない他の実践例についても分析を行なった。その結果、学習者が生み出した問いをいくつかの観点から学習者自身が分類し、問いを解く人数や時間を工夫していることが明らかになった。

以上の分析から、学習指導要領が求める学びの実現のためには、学習者が問いを生み出すことのできるような授業者の手立てが必要であることがわかった。今後の課題は、学習者から表出した問いのみを扱った授業であっても学ぶべきことを保証できるのかという、学習者が生み出した問いの信頼性を明らかにすることである。

要約方略と字数制限

日本語学研究室 七二二三 齊藤 里帆

本研究では、国語科教育や日本語教育でのより効果的な要約文指導を目指して、字数制限と要約方略選択との関連に関する仮説を検証するために、要約文の調査・分析を行った。仮説は、仮説①「制限字数が少なくなるほど、原文と同じ表現が減少し、作成者独自の表現が増加する。」、仮説②「制限字数が少なくなるほど、原文の複数の㉓(アイディアユニット)をまとめた表現が増加する。」の二つである。なお、㉓は単文を基本単位とする。

調査では、同一の論説文(二八七一字)を用いて、制限字数が異なる四種(九六〇字、四八〇字、二四〇字、一二〇字)の要約文の作成を大学生二〇名に求めた。分析では、要約文を㉓に分け、原文との対応関係から十三種の要約方略に分類し、制限字数別・調査対象者別に比較した。

要約文を字数制限別に比較した結果、仮説①は成り立つと判断された。特に、原文と同じ表現を多く用いる調査対象者で、原文と同じ表現の減少が顕著に見られた。一方、仮説②は成り立たないと判断された。原文の複数の㉓をまとめる場合、抽象化してまとめる表現を用いる要約方略と、抽象化せずにまとめる表現を用いる要約方略の二種類が用いられており、前者は仮説通りの傾向が見られたが、後者はそうではなかった。

要約文を調査対象者別に比較した結果、原文と同じ表現を用いる要約方略の使用率が高い調査対象者とそうでない調査対象者とで、要約文の構成に違いが見られることが明らかになった。前者は原文の構成を反映した要約文を書く傾向が見られたが、後者は原文の構成を大きく変更し、原文とは異なる表現を用いて要約文を書く傾向が見られた。

メディアの中で使われる方言の特徴的語彙

——日本各地のPR動画を対象に——

日本語学研究室 七一三七 加藤 春花

本研究の目的は、地方自治体等が制作したPR動画を対象にして、動画内で使用されている方言を分析し、PR動画というメディアの中で使われている方言の特徴や、その特徴の地域差を明らかにすることである。

東北・近畿・九州の三つの地域から、それぞれ五府県ずつ選り調査を行った。初めに、PR動画内の音声のテキストデータを作成し、そのデータの単語を品詞に分類した。次に、方言辞典類を参考にして、テキストデータから方言(地域特有の語彙である俚言類)を抽出した。最後に、抽出した方言データに基づいて、PR動画内での方言使用率等を、地域や府県別に比較し分析を行った。分析を行った動画数は、東北地域が三十三本、近畿地域が二十三本、九州地域が三十六本である。

分析の結果、九州地域・近畿地域の方言使用率が高く、東北地域の方言使用率は他の二つの地域の約半分であった。品詞別に方言の延べ語数を比較すると、どの地域でも助動詞が多く使われていた。また、助詞のうち、特に終助詞がどの地域でも多く使われていた。それ以外の品詞では、東北地域では代名詞が、九州地域では副詞が多く使われており、近畿地域では他の地域と比べて使われる品詞の種類が少なかった。

これらのことから、PR動画内での方言の使用に関しては地域差があることが示された。一方で、どの地域でも共通して助動詞や終助詞といった文末部分の表現で地域性を出そうとしていること、また、地域性が現れやすい特定の品詞を利用している場合があることが明らかになった。

これからの高等学校国語科における古典文法の指導法についての研究

——「主体的・対話的で深い学び」を目指して——

国語科教育学第二研究室 七一四四 佐々木 隆仁

本研究の目的は、高等学校の古典の授業で「主体的・対話的で深い学び」を実現するために古典作品の読みを深めるための効果的な古典文法の指導法について考察し、授業デザインを提案することである。

本研究では、主に文献調査を行った。『高等学校学習指導要領(平成三十年告示)』での古典文法の取扱いについては「読むことに即した」指導を求められていることが示されていた。授業実践の考察では、言語活動を中心とした授業で生徒に文法事項を定着させるために、古典文法を学ぶ意義を認識させ古典作品に興味や関心を持つてもらわなければならないことがわかった。先行研究においても、「読むことに即した」指導について言及されていたが、それでも文法の指導方法が改善されなかったのは、教員が必要だと考えている「読むことに即した」文法指導と、生徒が必要だと感じている文法事項との間にずれがあることが原因の一つと考えられる。そして、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業では言語活動が中心となるため、限られた時間の中で文法指導をする必要があることもわかった。「読むことに即した」文法指導であること、古典文法を学ぶ必要性を感じさせること、限られた時間の中で必要な文法事項を指導することが、これからの高等学校の古典文法の指導に求められていることであると考えられる。これらのことを踏まえ、題材に『竹取物語』を設定して敬語に着目した文法指導を組み込んだ授業デザインを提案した。

谷崎潤一郎『魔術師』論

近代文学研究室 七一四七 吉田 亜優

本研究では、谷崎潤一郎『魔術師』について、舞台のモデルに浅草公園が選ばれた理由を探るとともに、従来十分に行われてこなかった登場人物に着目した分析を行い、新たな解釈をすることを目的とした。

まず作品の舞台である浅草公園について、先行研究を含めた調査を行い、おもに谷崎個人の浅草公園に対する考え方、浅草公園が谷崎に与えた影響等を明らかにした。浅草公園は谷崎の創作意欲をこの上なく高め、『魔術師』という作品の幻想世界を描き出すに最適なモデルであったということを確認した。

次に「私」、「彼の女」、「魔術師」の三人の登場人物について、また、「私」と「魔術師」、「私」と「彼の女」との関係について分析を行った。

「私」と「魔術師」には「美醜」の二項対立があり、関係の描写には従来の谷崎作品に見られる「美への拝跪」という構造が用いられているが、「魔術師」の人物造形は『魔術師』以前の作品に登場する悪女よりも谷崎の理想を体現する者として完成されていることで、より洗練された関係の描写が可能となっていることを明らかにした。また、「私」と「彼の女」の間にある「清さ」と「汚さ」の二項対立、そして「私」の裏切りとそれによる「彼の女」の変身は、上下関係という二者の位相を覆し、二者が対等な立場となることによって「私」と「彼の女」が同一存在であるということも明らかとなった。

以上のように、登場人物のもつ要素によって『魔術師』では幻想と現実の融和が鮮やかに描き出されていると考えた。

説明者と被説明者のやり取りに着目した説明研究

——オンラインにおける説明を中心に——

国語科教育学第一研究室 七一五三 塩澤 賢宏

本研究では、説明者と被説明者のやり取りに着目して、オンラインにおける説明面で、相手に情報を正しく円滑に伝えるために必要な要因を明らかにした。

口頭説明に関する先行研究を参考に、オンライン場面で説明者が幾何学図形を被説明者に口頭のみで説明をするという実験場面を設定した。調査で得られた発話は、発話の持つ意味によって各カテゴリに分類し、カテゴリ別発話数や総発話数に関連がないかを調べるため、相関分析を行った。また、説明終了後に、説明者には「わかりやすく説明できたところ」と「わかりやすく説明できなかったところ」を、被説明者には「わかりやすかったところ」と「わかりにくかったところ」を記述させた。分析の結果、説明者の発話数と被説明者の発話数や、被説明者が発した「質問」の回数と「繰り返し」の回数に正の相関があることがわかった。さらに、説明者と被説明者ともに「わかりやすい」と感じた部分として、「具体的な数字や言葉で伝えた点」を挙げていることがわかった。

これらのことから、オンライン場面では説明者が一方的に説明を進めるのではなく、被説明者が積極的に質問をしたり、相手に理解を示す反応をしたりと双方向のやり取りが盛んであることが、わかりやすさに影響するということがいえる。また、相手に何かを伝えるときには、曖昧な表現ではなく、数字などを使った具体的な表現を用いることが正しく円滑に情報伝達するのに有効であるといえる。

打ち言葉における「あのー」について

——Twitterでの使用に着目して——

日本語教育学研究室 七一五七 野上 祐佳

本研究は、話し言葉では代表的なフレーズとして用いられる「あのー」が、打ち言葉上でのような機能や特徴を持つのかを分析し、相手と直接対面していない状況、特にTwitterにおいて「あのー」が出現する理由を明らかにすることが目的である。

調査では、「あのー」の出現位置、「あのー」の機能、元のツイートから「あのー」が含まれるツイートまでの時間差の三点を対象とした。ツイート中の「あのー」の出現位置は、文頭に出現している割合が最も高いという結果となった。先行研究の「あのー」の六つの分類を参考にし、独自に五つの分類を加え、Twitter上の「あのー」の分類を可能にした。また、元のツイートから「あのー」が含まれるツイートまでの時間差については、十分以内に発信された割合が最も高いという結果となった。

さらに、Twitter上の「あのー」と話し言葉の「あのー」の違い、それぞれの機能と元のツイートからリプライまでの時間差について、「あのー」の打ち言葉における媒体ごとの出現率の差について考察した。その結果、本稿が独自に加えた五つの機能には「疑似性を持つ」という特徴があり、この特徴が先行研究の分類と異なることを示した。それぞれの機能と元のツイートからリプライまでの時間差については、相手への配慮が関与している可能性を示唆し、Twitter上で「あのー」が出現しやすい理由について、先行研究がTwitterの特徴として挙げている「自由度が高い」と「強力な伝播力」が影響を与えている考えを示した。

小学校国語科の文学的な文章における批判的な読みの指導法

国語科教育学第二研究室 七一六七 迎 祐太

本研究の目的は、文学的な文章における批判的な読みとはどのようなものかを明らかにし、それをもとに、小学校国語科の文学的な文章における批判的な読みの指導の授業デザインを作成することである。

まず、本研究では、文学的な文章における批判的な読みとは何か、また、なぜ文学的な文章における批判的な読みを指導する必要があるかを明らかにした。文学的な文章における批判的な読みは次のような読み方を指すものである。①文章(内容・構成)を理解する、②文章の書き手について考える、③内容・構成に対する自分の意見を形成する、④自分の考えを集団の中で表明し、他者の考えも踏まえ、検討する、また、中央教育審議会答申、PISA調査等の学力調査、学習指導要領からわかる、子どもに必要な力を育てるには、文学的な文章における批判的な読みが有効である。

先行研究からわかる、文学的な文章における批判的な読みの指導の手立てとして次の点が挙げられる。①文章の書き手の工夫を考える発問を設定し、根拠を文章の内容・構成から書かせること、②文章の内容・構成を評価するときに自分の知識や経験、本文をもとに書かせること、③話し合いのときに自分の意見を伝えるために、考えを明確にさせること、以上のことを踏まえて授業デザインを構想した。

これらのことを踏まえて、文学的な文章における批判的な読みの指導を目指す『一つの花』の授業デザインを作成した。内容・構成や作者の工夫を本文の場面の比較や知識、経験をともに評価し、話し合いをする活動を行うことで、批判的な読みを育成できると考えられる。

中高生用参考書はどのように古文文法を教えようとしているのか？

——助動詞を対象とした研究——

国語科教育学第一研究室 七一七五 加藤 毬乃

本研究の目的は、古文の助動詞「る・らる」「む・むず」について中高生用参考書を比較することを通して、参考書内でなされる文法事項の説明の工夫を見出し、初学者に対する古文文法の適切な指導方法について考察を行うことである。また、複数の参考書分析の方法を確立させることである。

まず、「参考書」の定義づけを行い、古文文法の中高生用参考書四十八冊を研究対象として抽出した。次に、学習内容に関する「内容」と、学習者に伝えるための工夫に関する「教え方」とについて、先行研究をもとに参考書間で違いが見られると予想される点を分析観点として設定し分析した。分析の結果、「内容」については、「る・らる」「む・むず」のいずれも、それぞれが有する文法的意味の提示の順序が、参考書間で特に大きく異なっていた。いずれも助動詞を取り扱う項目内での提示順には一貫性が見られるため、学習者への配慮がなされていると言える。この点を、「意味の提示順」という分析観点の一つとして設定することは有用である。「教え方」については、いずれの助動詞においても参考書間で採られる形式や活用表の配置等が異なっていたが、助動詞間で差異を見出すことは出来なかった。本研究では、複数の参考書分析に際し「内容」と「教え方」に観点を分けることが有用と分かった。今後は、それ以外の観定の定義や判断基準についてそれぞれ検討し、複数の参考書分析の方法を確立させる。その後「る・む・むず」以外の助動詞についても分析を行い、参考書の説明の工夫を見出すことを通し、初学者への適切な古文文法指導の方法を考察する。

オノマトペの描写対象について

——漫画と小説の比較から——

日本語学研究室 七一八〇 松原 紀音

本研究の目的は、漫画と小説に用いられるオノマトペの描写対象を中心に調査・分析し、「イラストを主体に表現される漫画」のオノマトペと言語のみで表現される小説」のオノマトペの違いを明らかにすることである。

調査対象は、「原作漫画」「五作品とそれらに対応する」「ノベライズ作品(原作の漫画を小説に書き換えた作品)」、「原作小説」「五作品とそれらに対応する」「コミカライズ作品(原作の小説を漫画に書き換えた作品)」である。まず、対応している作品の漫画と小説を比較し、両作品に共通する部分に用いられているオノマトペ(延べ語数で、漫画八六八語、小説五二一語)を収集した。次に、収集したオノマトペを描写対象の違いによって分類した。分類項目は「声・音(きゃー、ガタガタ等)」「動作類(ぐいつ等)」「見た目(ゴチャゴチャ等)」「身体感覚(ずきずき等)」「感情(ドキドキ等)」「その他(ジャン等)」である。最後に、描写対象の分類項目ごとに漫画と小説に用いられるオノマトペの特徴を考察した。

漫画では「声・音」を描写対象としたオノマトペが多く使用されていた。動作を表すイラストに「声・音」を表すオノマトペを加えることで、視覚と聴覚の両面から臨場感を出していることなどが明らかになった。一方で、イラストなどの視覚的情報が殆どない小説では、視覚的情報を表す「動作類」や「見た目」を描写対象としたオノマトペが多く使用されていた。小説では、視覚的情報を表すオノマトペを用いることで、言語のみでも、より細かい状況を生き生きと描写していることなどが明らかになった。

小学校における書写教育の在り方

国語科教育学第二研究室 七二八二 杉本 美紗

本研究の目的は、小学校の書写授業において、子どもたちが意欲的に学ぶことができ、その学んだことが身につくような授業はどのようなものがあるか研究し、指導案の提案をすることである。

まず、本研究では書写とはどのようなものをさすのか、また、これまで行われてきた書写教育の現状について明らかにした。書写とは、芸術表現ではなく、多様な表現美を目指す芸術科書道の基礎として位置づけられており、「とめ、はね、はらい」を行い、文字を正しく整えて書くものである。書写の授業では、お手本を見て書き、作品として授業終わりに提出するという流れで行われており、そこでは教師による書写力を高めるための指導はあまりなされていないことがわかった。さらに、小学校学習指導要領解説国語編には、「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導する」とあるが、実際は毛筆と硬筆をわけて学ばせていることがほとんどであった。また、苦手意識をもちながら書写の授業に臨んでいる教師がいるということも明らかになった。

研究の結果、教師は、「毛筆と硬筆のつながりをもたせた授業を構成すること」、「子どもたち自身にどのようにすれば正しく整った文字が書けるようになるのかと疑問をもたせること」が必要であることがわかった。そのようにすることによって、子どもたちに書写の知識と技能が同時に身についていくと考えられた。そのため、これをもとに子どもたちが自ら課題を発見、解決していく活動を設定し、書写に苦手意識をもたせない授業と毛筆と硬筆のつながりをもたせた授業の指導案を作成した。